

一番便利な代表的公園墓地で都市計画的な社会施設」とあり、略地図として山手線からの路線図が掲げられていること、また同チラシに列挙された「青葉園建設協力委員会」の委員名に浦和市厚生部長・大宮市総務部長など埼玉県関連よりも東京都関連の役職を肩書きとする人物が多いことから、裏付けられよう。中でも「首都緑化推進委員会常任委員長、農大教授」として「井下清」の名が並んでいることは、戦前から戦後への公園墓地構想の系譜を考える上で見逃せない事実である。

さらに注目すべきは青葉園の設立者・吉田亀治の経歴である。園内に立つ「青葉園創設者 吉田亀治翁」碑に拠れば、吉田は明治三十七年に三橋で生まれ、県立浦和中学卒業後は東京市役所地理課に就職、昭和五年に幹部候補生として麻布の歩兵第三連隊に入隊、その連隊長が山下奉文大佐であった。昭和十六年七月に朝鮮防空隊に招集され航空監視隊長として終戦を迎えた吉田は、戦後「悲運の死を遂げた山下將軍をはじめ祖国のために殉じた多くの英霊を慰めるべく自己の所有せる雑木林を中心に公園墓地新設を計画」し、青葉園を開園、次いで法人化を推進したのである。財団法人青葉園設立趣意書が示す当時の同時代認識、すなわち「そもそも墓地は祖先の霊が永眠する聖地である国民崇敬の地である」が、「このように神聖であるべき墓地がややもすれば適切な管理が行はれないままに数多く散在し且非衛生的存在となっているのが我が国の現状」との認識を前提として、終戦後に荒んだ「国民の同義」を「日本本然の姿」へと戻すために「雑然と市内外畑の片隅に散在の墓地改葬、都市美上、衛生上、緑地帯に散策しつつ両親の墓に参拝、

崇神尊祖の念を涵養」し、「日本精神自立の資」とする試みは、拙稿「思想を善導する環境設計」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第一六九集)で検討した戦前の細野雲外による構想との連続性を指摘しうる。現在も山下奉文の墓をはじめとする英霊追悼関連施設は、園内に散在する。

現在の青葉園公式サイトからは、世間へ何を訴えかけているか、翻って現在の世間が墓地に対してどんな興味関心を抱いているかを浮かび上がらせる。たとえば「美しい緑に囲まれた」「緑ゆたかな」「四季折々の花木」などの文言と数々の画像からは、墓地へのエコロジー的興味関心をうかがわせる。一方「よくあるご質問リスト」に示される「墓地は所有権移転による分譲ではなく、永代使用の承認という方式でお取り扱いしております」また「後日の費用ご負担は、所定の管理料以外一切ありません」などの文言と、税込表記された料金表からは、墓地へのエコノミー的興味関心をうかがわせる。私見では、墓地への(二つのエコ)的興味関心は一九九〇年代から現在まで継続している。次なる課題としては、どのように戦後日本から現在へと転換したのが問われる必要がある。

現代の霊場における供養の実態

——四萬部寺・八葉寺の事例から——

本発表では現代の霊場として秩父観音霊場の一番札所四萬部寺と、会津冬木沢の八葉寺の二カ寺を取り上げ、供養の対象者や依頼者の分布といった実態を考察した。

徳野 崇行

四萬部寺の施主の氏名・住所と供養対象が記載された勸募帳^{ちよう}から得られた二〇〇九年と二〇一一年の統計を比較すると、二〇〇九年から二〇一一年にかけて、家名を記さない「先祖代々」や「水子」が減少し、「戒名」「祈禱（現世利益）」が増加する傾向にある。男女差をみた場合、とりわけ顕著な変化は女性の「先祖代々」が二四・一%から一六・三%に減少し、「戒名」が二八・五%→二六・六%に増加したことである。その要因として嫁いだ女性が生家の父母を戒名で供養するといった妻方の死者供養のケースが増加した点があげられるだろう。

供養依頼者の分布状況を見ると、檀家をほとんどもない四萬部寺では、新盆供養が秩父市とその近隣市町村で慣習化しているため、供養依頼者の多くは埼玉県西部に集中しており、県内の霊場寺院である金乗院（山口観音）や永福寺（施餓鬼寺）のある所沢市・杉戸町とその周辺に四萬部寺の依頼者は少ない。二〇〇九年から二〇一一年にかけての依頼者数の増減をみると、県北部の深谷市・熊谷市・行田市・寄居町などの県北部や群馬県で増加し、秩父市近隣の東秩父村・横瀬町・小川町、県外では千葉県・東京都・神奈川県で減少している。増加の理由としては秩父地方の出身者が結婚などを契機に居住地を移しても供養を申し込んだり、秩父巡礼の際に四萬部寺での供養を知って申し込むことがあげられ、減少の理由としては新盆供養を菩提寺だけでなく四萬部寺でも行う慣習の衰退が考えられる。

供養対象においても緩やかな変化が見て取れたが、四萬部寺では依頼者においても同様の傾向が認められる。四萬部寺の供養を新盆供養のためにのみ行う人も多く、菩提寺のような継続

的な関係ではなく一年単位の短期的な供養形態であるため、地域によって増減が起こりやすく、その信者組織は流動性を帯びていると考えられる。

会津八葉寺では、先祖供養と新盆供養を兼ねる「冬木沢参り」に焦点をあて、インタビュー調査から得られた供養の経緯やその対象、動機について報告し、とくに原発事故による立ち入り禁止区域からの避難者が先祖供養をする事例に着目した。八葉寺の所在する会津若松市では大熊町役場が会津若松市役所に臨時窓口を設けたり、仮設住宅を設置するなど避難者の受け入れを行っている。避難者たちは家の墓地や菩提寺が福島県沿岸部にあるため、お盆の儀礼やお墓参りなどを営むことができなかったが、八葉寺のことを人伝で聞いたり、チラシを見て知ること、先祖供養を申し込む例がみられた。このことから八葉寺は「会津総菩提所」と称されるように檀家制度に依拠しておらず、様々な人々の供養を柔軟に受け入れているため、避難者たちの墓や菩提寺の代替的役割を果たした点を指摘した。

「生・死・死後」の色のイメージ

——美大生への質問紙調査から——

久保田 力

本稿は「芸術とスピリチュアリティ」に関する美大生（東北芸術工科大学）への二回目質問紙調査の結果から、生・死・死後の色のイメージについての分析報告である。一回目の結果は『印度学宗教学会論集』三七号に、二回目の全体結果は『東北芸術工科大学紀要』第一八・一九合併号に報告した。スピリチ